

る表情は飢えた獣が獲物を見つけた瞬間の、危険なまでの歓喜に彩られていた。

「……見つけたぞ」

その声は、三年前に私を断罪した王太子の冷たい宣告とは比べ物にならないほど、深く、低く、そして決定的な力を持っていた。まるでこの瞬間のために生きてきたとでも言うような、圧倒的な確信に満ちた響き。

「見つけたぞ、私の愛しい人」

男は、エルネスト・ヴァレンティヌス・ドラケンブルグ。隣国ガルデニア帝国の若き皇帝陛下その人だった。その名と、肖像画で見たことのある顔を私の記憶は即座に結びつけた。しかしなぜこのような場所に、しかも私を「愛しい人」と呼ぶのか、まったく理解が追いつかない。ガルデニア帝国は私の故国とは長年緊張関係にある大国で、近年では小競り合いも頻発している。その皇帝が、たった一人で（いやよく見れば広場の各所に武装した護衛らしき人影が控えているが）辺境の町に現れること自体が異常だった。

混乱で硬直する私に向かってエルネストは優雅な動作で馬から降

り立った。マントが地面に触れるか触れないかの瀬戸際で、彼は一歩また一歩と私に近づいてくる。広場にいた誰もが息を呑んでこの光景を見守っていた。薬草の束を握りしめたまま立ち尽くす私の顎に、彼は長く節だった指をそっとかけ上向かせた。その指先は驚くほど熱く、触れられた皮膚から火がついたように熱が広がっていく。

「三年だ。三年もの間、よくも私の目から逃げおおせたものだ。だがもう終わりだ。お前は今日、ここから私と共に来る」

「な、にを……おっしゃっているのか、わかりません。人違いでは……」

ようやく絞り出した声はかすれて震えていた。エルネストは唇の端をゆっくりと釣り上げ、笑みとも冷笑ともつかない表情を作った。黄金の瞳が、獲物を逃がさない捕食者のように細められる。

「人違い？　ありえない。私はお前の顔を一度見た瞬間から、三年間、片時も忘れたことはない。セレスティーヌ・フォン・ローゼンベルク。あの忌まわしい茶番劇の夜、私もあの広間にいたのだ。無論公式の賓客としてはな。隣国の皇太子(当時はまだ皇太子だった)として、お前たちの国の王太子の婚約破棄という醜聞を見物するために招かれた。そして私は見た。すべての冤罪を黙って受け入れ、

一滴の涙も見せずただ誇りだけで立っていた一人の女を」

言葉が、刃物のように私の記憶を切り裂いていく。あの夜、広間のどこかに彼がいたというのか。ガルデニア帝国の皇太子が列席していたことは、そういえば後から聞いたかもしれない。しかし当時の私には、自分に向けられる悪意と好奇の視線だけで精一杯で、賓客の顔など見る余裕はなかった。

「あの場にいた誰もがお前を罪人として見ていた。あるいは哀れみの対象として。だが私は違った。お前は、私が生涯でただ一度だけ求めた女だった。嵐の中で倒れずに立つ一本の檜の木のような、気高さと強さをその身に宿した存在。私はその場で決めた。いつか必ずお前を手に入れると。国に帰ってからすぐに密偵を放ち、お前の行方を追わせた。だがお前は国境を越えた後、まるで煙のように消えた。三年もの間だ」

エルネストの声には、本物の執着の熱が込められていた。それは狂気じみているとさえ言えるほど濃密で、私の背筋を冷たい戦慄が走り抜けるのと同時に、魂のずっと奥深くで何かが不意に震えた。誰かに、これほどまでに強く求められたことなど私の人生で一度もなかった。婚約者だったアルフレッドは、私に対して常に儀礼的で時に優しくだったが、そこには決して燃え上がるような情熱は存在しな

かった。だからこそアリシアのあからさまな誘惑に容易く落ちたのだろう。だが、今私の前に立つこの男の瞳はまるで私こそが世界で唯一の宝であるかのような、執着と飢えでぎらついている。

「……私はもう公爵令嬢ではありません。罪を着せられ、追放された、何の価値もない女です」

「価値を決めるのは私だ。私が欲しいと言えば、この世にそれ以上の価値が生まれる」

エルネストはそう言うと、有無を言わさぬ動作で私の腕を取った。抵抗しようとしたが、彼の力は外見よりも遙かに強く私の腕は鉄の枷にでも嵌められたように動かなくなった。

「荷物をまとめろ。と言っても、お前の持ち物などこの藁草の束とその粗末な肩掛け鞆くらいだろう」

「待って、私はマルタに……一緒に住んでいる人に、説明を……」

「後で人を遣って知らせる。お前が二度と戻らないことをな」

その言葉の絶対性に私の抵抗の意志が根こそぎ奪われていく。私は

ただ呆然と、彼に手を引かれるままに広場を横切った。人々は物言わぬ観客のように道を開け、私たちが広場の出口へ向かうのを見守っていた。誰も、皇帝の行動を止めようとはしなかった。当然だ。この辺境の自治村落や町は、ガルデニア帝国の庇護に依存して成り立っている。皇帝の意向に逆らう者などいるはずがなかった。

広場の外れには豪華な馬車が待っていた。黒い漆塗りの車体に金の紋章が輝き、四頭の白馬が静かに嘶いている。こんな辺境の町には完全に不似合いな、帝国の権力そのものを具現化したような車だった。エルネストは私をほとんど抱え上げるようにして馬車に押し込み、自分も続いて乗り込んだ。向かい合って座る私と彼の間には、小さな卓が設えられ葡萄酒の瓶と二つの杯が置かれている。まるで最初から、こうなることを予定していたかのような設えだった。

馬車が動き出すと同時に窓の外の風景が流れ始めた。見慣れた町の風景が遠ざかっていく。マルタの家に戻ることも、薬草園の匂いの中で目覚める朝もおそらくもう二度とない。私は音もなく、自分の人生がまた根こそぎ奪われていく感覚に襲われていた。しかし今度は三年前とは違った。奪っているのは敵意ではなく、異様なまでの執着だった。それが恐怖であるのか、あるいは別の何かなのか自分でも判断がつかない。

「震えているな。寒いのか、それとも私が怖いのか」

エルネストが静かに問うた。声は先ほどの公衆の面前での宣言のような響きとは違い、いくぶん低く個人的な響きを帯びていた。

「……両方、です」

正直に答えた。誤魔化す気力もなかった。彼はしばし私を見つめ、それから自分の肩に掛けていたマントを外すと、無造作に私の膝の上へ投げかけた。厚い黒のビロードは彼の体温をまだ含んでいて、包まれた膝からじんわりと温かさが広がっていく。

「寒さはこれで凌げ。恐怖の方は……すぐに慣れる。お前は適応力のある女だ。そうでなければ、三年もあの辺境で生き延びられなかったはずだ」

「私はただ、ひっそりと暮らしていたかっただけです」

「その願いは叶わなかった。残念だったな。だが新しい願いを覚えるがいい。私の愛しい人として、帝国の後として生きる願いを」

后。その言葉が頭の中でこだました。私は正式な罪人として追放さ

れた身だ。そんな女が、今や我が国よりも強大になりつつあるガルデニア帝国の皇后になるなど、正気の沙汰とは思えない。しかしエルネストの口調には、一片の冗談も迷いもなかった。彼は本当に私を皇后にするつもりなのだ。理由はただ一つ。三年前に一目見て、私を欲しいと思ったから。その純粋なまでの執念が、一国の皇帝の伴侶を決める理由として彼の中では完全に正当化されているらしかった。

馬車は町を離れ街道を北へと進んでいく。ガルデニア帝国の国境は、この町から馬車で一日半ほどの距離にある。窓の外に広がる荒野の風景が、暮れゆく秋の陽に橙に染まり始めていた。やがて夜が来るだろう。この馬車はどこかで停まり、野営をするのだろうかそれとも夜通し走り続けるのか。私には何もわからなかった。わかっているのは、隣国皇帝の狂おしい執着の対象として私の新しい地獄が今始まったということだけだった。

実際には、馬車は夜になっても停まらなかった。御者と護衛の騎士たちが交代で休憩を取りながら、二十四時間ほとんど休みなく走り続けたのだ。途中、二度ほど簡易な駅通で馬を交換し食料と水を補給しただけで、あとはひたすらに車輪が回り続けた。その間、エルネストはほとんどの時間を私と向かい合って過ごした。彼は時折葡萄酒を口にし、私にも勧めたが私はほとんど口をつけなかった。空

腹は感じていたが、緊張と疲労で胃が固く縮こまっているような心地で、何かを食べたり飲んだりする気になれなかったのだ。

「少しは食べろ。倒れられては困る」

夜が更けた頃エルネストは不意にそう言い、小卓の引き出しから乾燥させた肉と白パンを取り出して私の前に置いた。確かに、このまま何も食べなければ本当に倒れてしまうかもしれない。私は無言でパンをちぎり、少しずつ口に運んだ。パンは驚くほど柔らかく、バターの豊かな香りがした。乾燥肉も塩加減が絶妙で、辺境の粗末な食事に慣れた舌が戸惑うほど美味だった。食べ始めると、皮肉なことにそれまで感じなかった空腹が急に自覚され、私はほとんど夢中でそれらを平らげてしまった。その様子をエルネストは満足げに見つめていた。野生の小鳥を手懐ける時のような、慎重さと優越感の入り混じった眼差しだった。

「いい食べっぷりだ。貴族令嬢だった頃は、小鳥のように少ししか食べなかったのではないか」

「……宮廷では、令嬢は少食であることが美德とされていきましたから」

「馬鹿げた慣習だ。健康な女はよく食べ、よく眠り、よく笑うべきだ。お前もここ数年でその馬鹿げた慣習からは解放されただろう」

確かに、辺境での三年間は腹が減れば食べ、疲れれば眠るという人間として当たり前の生活だった。宮廷の息苦しい規範から解き放たれたことは、密かな解放感を伴っていたのも事実だ。エルネストはそういうことを見抜いて言っているのか、それとも単に私の見た目の変化から推測したのか、判断がつかなかった。いずれにせよ彼は私をじっと観察している。その瞳は、私が何を感じ何を考えているかをすべて見透かそうとするかのように、絶えずこちらを向いていた。

その視線を痛いほどに感じながら、私もまた、彼のことを観察していた。これまで肖像画や噂でしか知らなかったガルデニア皇帝は、二十三歳で即位し、わずか三年の間に貴族の反乱を二度も鎮圧し、議会の権限を大幅に縮小して皇帝親政を確立した鉄血の君主として恐れられている。実際に向かい合って見る彼は、噂に違わぬ覇気を全身に漂わせていた。広い肩幅、すらりと伸びた長い脚節だった大きな手。容貌の端整さはともかくとして、何よりも異様なのはその存在感の強さだった。閉ざされた馬車の中で二人きりでいると、彼の気配が空気そのものを支配しているように感じられ、私は自分の思考さえも彼の領土の中にあるような奇妙な錯覚に囚われた。